

補賡の ユーモレスク

(今村 清)

成田さんの御札なんて生やさしい物じゃあない。その板片れ。現実の問題として一日三度は必ずお祈りして呉れるボケツトの奥深くしまひ込んである時々ハツミして胸元をおさえて見る。

ある！ある！安心をする。こゝに居る誰かが一應一通の物は食たお互互の、一皿のカシミアに斯くも氣を使ふ丸なればこそである。

エラブカの食堂は豪勢であつた。

村の歴史 (一)

(中田 美穂)

二、古代社会

①、出雲族と大和朝

原始社会時代からあちこちらに狩獵や農耕に従事しながら、山野の猛獸や毒蛇に悩まされて住んで来た人たちの上に先づ最初に司配の開拓指導に當つた人は諏訪明神の御子外縣神(そまがたのかみ)であつた。

續いて大和朝廷の威力が漸次東進して、國家的統一に移つた。日本武尊の伊那通過にも必ず吾が龍丘の地を通つたことは想像される。古代社会の大體に於てこの大和朝廷が國土を統一した世紀三百年から源頼朝が鎌倉に幕府を開いた千二百年に至る約九百年間を指すのである。

②、住民の様相

この時代になる住民の生活もだん／＼進歩して、住居は天地根元作りの簡単な掘立小屋で屋内に木、竹、草などを敷いた。食物は米、粟、稗、野菜、鳥獸を材料として簡単な調理を加え、素焼の土器や木の葉を用いた。農業も米、麦を主として粟、豆を作り、農具も石や木で作つてゐたのが青銅や鐵を使用するようになった。養蚕も亦大に行われ麻や

た。白亜の殿堂の地下室で一氣に三百名宛收容出来る。一テール六名宛着席する。ボケツト奥深くしまひ込んである食器を六枚テーブルの端に並べ、チクツトボーイが愛想よくチクツトをいたゞきます。言ひ乍ら其の目は中々する。詳細に点検し乍ら集る。行く。白い上着に白の帽子。本物の食堂ボーイがカーレアー六枚宛のせたるじを目八分に捧げ持て来て、お待遠様。さつさ板に付た調子で御す。のつて来た順に配る。のである。その時六人十二の眼は等しくピカピカと注めるのである。いつの時も又さう素直に見よう努力し

格の加工も衣料に利用された絹や棉の皮、麻で織つた筒袖の上着を着て、下部男用今の女はスカートのようなものを付けて、足は皮で作つた靴をはいて居り、勾玉なごで頸や腕をかざる。男は髪をみすまらに、女は島田まげのようにまとめに結び、肩に領布をかけて居た。

當時の住民の農耕生活の様子は『萬葉集』にてゐる歌の中から抄出してゐる。

★筑波嶺の新築蚕の絹はあれご君が御衣し奇に着欲しも

★新室の蚕時に来れば薄薄穂に出し君が見えぬこのごろ

★稻つけばかざる吾が手に今宵かも殿の若子が取りて嘆かん

★言ひ出しは誰が言なるか小山田の苗代水の中流にして

でも自分の盛が少く見へて仕方ないので有る。その運命の定る瞬間丸ホナラでは言ふても分らん氣持である。それが若し自分の皿が傾斜でもして居よう物なら身も世も無く泣き度い氣持で有つた。

傾いた皿これも運命であらう。

運命にしては余りに惨酷で有る。神のいたすらをかこつたであつた。して目を細くして一匙一匙をしんみり味ふのである。底の見るのが辛さには誰かがさじを大意氣には使物物の足らん顔でスプーンを兼ねめ出で行くのである。一應落れ付を見せるのである。食の案内係が次々各々各々コルプスを案内して廻る。

伊那地方には規模大で珍らしい。塚原の二子塚を始め塚越、兼清塚、金山塚、西ノ塚馬寄塚、桐林大塚の七塚があり。圓形墳はたゞの七塚で居るだけ、實に百二十座を數えて郡下の總計七百座の中、吾が村で四分の一を占め強大な権力、高度の文化を持つた住民が、こゝにゐたことを物語つてゐる。古墳關係の遺物をみるに開善寺所藏の四佛四菩薩は鎧鎧言ひ、日本獨得の珍重すべきもの、墳輪は権現堂。塚原から出てゐる。装身具の耳飾や、勾玉、菅玉があり。武器には直刀、劔、やじりや精巧な柄頭もあり、武器には甲冑があり、馬具の多いことも注意すべき事である。日常使用の家具、土製品の中には彌生式土器、硬質灰青色の須恵器が出てゐる。

古墳の集郡地帯は同時に住居集落の地帯で、大和を中心とした文化が大和朝廷の権力の伸張と共に漸次當地方に浸透して東北邊隅の蝦夷征伐の足だまりに、氣候が温かく風土の良し、而も交通に都合のよい當地が選ばれたことと解釋される。

④、大化の改新

諏訪を中心とした外縣軍の勢力が次第に大和朝廷に移り大化の改新で天皇を中心とした豪族の絶体的支配をふるう

古墳の集郡地帯は同時に住居集落の地帯で、大和を中心とした文化が大和朝廷の権力の伸張と共に漸次當地方に浸透して東北邊隅の蝦夷征伐の足だまりに、氣候が温かく風土の良し、而も交通に都合のよい當地が選ばれたことと解釋される。

④、大化の改新

諏訪を中心とした外縣軍の勢力が次第に大和朝廷に移り大化の改新で天皇を中心とした豪族の絶体的支配をふるう

第二大隊！

終り迄聞き終らん内にそれ！つこめ掛る。食堂の入口はガキの國、押合いへし合ひ大混雑である。

食堂ボーイより切りの心臓の太いのが聲をからしてお静に願ひます。お静に願ひます。丸で國會の議長さん見度いである。

して時ならん時にしつび込む不逞の輩、整理のため一ケケケツト拜見します。之又汗だくで有る。失禮ですが未だ第三大隊の番でありませんののでござい。引さがり組も居る。何さかかんさか文句入りの組も有る。それが六〇〇グラムのオモ湯で鳴をすめる。大人でも子供でも偉い人でも

中央集權國家で、氏姓をもつたものは貴族が官僚といつた部は公民となつたが政治上の權利は無く、口分田に拘束された奴隷となり、年に六十日以上は國司のところで雑役に従わねばならなかつた。

新たに地方制度を整備して信濃國伊那郡を定め、國司郡司を置いた。

租税として本稻、雜稻(粟か豆)を納め、絹の絹納(特産物を納上した)。

それから後に國郡の間中に郷を置き、伊那郡に五郷があり、松川より南の天龍川西方一帯を『輔業郷』と呼んで輔業郷の人口は約二千五百人のことゆゑ、竜丘村地帯の当時の人口も如何に稀薄であつたかを想像できる。

⑤、布目瓦

奈良時代から平安時代にかけて大寺院が郡外には用いながつた布目瓦が出土するのは開善寺附近、御所山、前林の白井原の下段の二箇所外に伊那郡では座光寺村に

平凡人でも大したかわりはないさうである。食堂の歸りは皆紳士なり。之のチケツトのように偽造される。時折り硝子で引こすつては模様をみるの之の偽造を除くのである。由は布目瓦の出土だけでなく聖武天皇が造佛像を諸國に置くことが國史に有る。

前林附近に佛師の地名がある。この造佛像司の關聯がある。うす(法僧か)経田(長石寺に關聯)等の地が附近にあつて古寺の存在を思はせる。

御所山には高貴な人か豪族の住宅が有つたようだ。開善寺附近の無量開善寺の前身も考へて差支ないだろう。

桐林と長野原に製陶所の跡が現れてゐる。桐林は河内が洞云うが河内から移住した陶工が居たので、其の生國を地名にしたようである。

長野原の方は始めの土器製造が時代の進むにつれて金屬を扱う銀冶の仕事に變つた。當時畿内地方から銀冶の術を傳へた業者が金屬を司る金山彦の信仰をも傳へて金山社を創設したのを見解は單なる想像だけでない。郡内に現在金山彦命を祭つた旧村社は長野原の一社だけである。

⑥、道、驛、港

人口が増加して聚落をなし外國文明が輸入されるようになると隣接者との交渉が繁く

これは本當の話ではない。だが讀む人が本當の様な氣がするとしてもそれは筆者の責任ではない。

★なるほどね

増田建設相が天龍川水害觀察に来た時、そのついでに、罹災民は擧つて門島ダムの撤去方を陳情に及んだこと。これは建設大臣である。取こみはカンカッ連である。と言明した。

★人口政策

政府は近く全國各家庭へヒン業の無料配給をする事に決定したがその財源として新に出産税を課する管である。

★その通り

職業安定所ではその業務實態に添う様左の通り各稱を變更した失業者名簿製作所

詞歌の募集

蟬の鳴く音も身に沁みる暑さ、涼を外に求める今日この頃。お盆も近づいて来ました。私達の夢を實現する一歩として商會觀光部で詞歌を募集します。『村の名所』『産物』『誇り』

『時又の昔懐かしい港の町』を織込んでいたゞき、本年は伊那節調で作詞して下さい。盆の三日間時又青年會の主催する盆踊りに全村民も参加していただき、歌い、踊りたいと思ひます。採用分には薄謝を呈します。

一、期日 八月五日

一、届先 時又 松原薫人 青年會 沖田喜久男

村内のほれ話

×水害の原因の主なるものが門島ダムにあると思つたら國の役人当局はそれを否定して居る。河床が門島からさかのぼつて約八キロの天龍峽の橋附近で約十二米五〇、時又では四米四〇、辨天では二米余上昇した。それが毎年高くなりつた。それを原因七不思議の一つであらう。

この問題は不思議だと思つておける生やさしい問題ではない。水害被害者だけに問題を任せずに、関係町村はもつと強く日発に當るべきだとの聲が強い。

交渉相手に不足はない。頑張れ。

×先ごろの洪水で天龍川の水源が所々変つたが、松川屋附近の河底が急に深くなつた様子ですから、水泳の際は注意が必要の由。

×縣が無償で貸して呉れるミ言う乳牛は最初の申込みは要項不徹底の爲資格のない人が多し、結局再募集して申込み二十三名、その内拾名が幸運のくじを引く譯だが縣下全體では何千頭の申込みになつて吾も／＼運動も多くなつた。

×由、油揚をトビにさらわれぬ様に御ねがひしたい。

×又注射の文句で恐入るが今度百日咳の注射を全村の子供に命令で強制するやうにするが一名分二百円の由、野菜や物價の割に一寸高すぎたお話を聞いたら、注射に反對ではないが、お値段が氣に食わん、その筋へ不満の意を表した。

×農休み賣出しを、七月二三日の時又が抽せん祭付でやつて豫定より一四〇%の賣上で盛況。農協では七月十一、十二日兩日全村にビラを配つて大賣出し、大勉強でこれも相當の賣上げ、さうせ必需品の買物なら村内の商店や組合を利用するの経済を發展させたい、だが飯田や八幡に負けない様なサービス勉強が大切だ。その事を御忘れなく。

なり、道路の必要が生じる。日本武尊の東征の歸路は赤穂と神坂の間は然然しないが文武天皇の大寶二年に岐蘇山道が出来、延喜式による神坂峠を越えて阿智、育良の兩驛を過ぎる官道が出来た。阿智育良兩驛を結ぶ官道は川路村の琴原から開善寺附近に出た塚原を経て白井の谷を三日市場に行くのが道筋を傳へられる。

時又の港としての創始は、長石寺と遠州秋葉神社の縁起記に結び付けて考へるべきである。養老元年行基大師作の觀音像を安置して一字を建立したのが長石寺の開基である。行基は常に弟子を伴ひ天下を周り、経を説き寺を造り橋を架け、井を掘り、池を造る功あり。畿内だけでも寺や道場を四十九建て、播磨津津の間だけでも五所の泊船處を設け、民間尊崇して行基大菩薩云うてゐるようになり、行基が延喜官道を通過の際に龍東や天龍川下流え通行の必要を認めて舟や筏に依る舟便をつくり、衆生済度のために一寺を建て、附近に舟行の便を待つ人のために院坊を設けて宿泊休息の設備をして行旅の難を救われた。想うに舟の出る『時を俟つ』ことが時又の地名の起りではないだろうか。

時又港はこのように古くから發端してゐる事實の更なる一つに記録は泰阜村の樽木踊りの歌詞の一節に

鎌倉殿の御ひ族が天龍川すじ御巡檢こ、は時又川岸か通る筏にうちりてげきもちようしも

古(平安時代)大陸文化の影響により、著るしく、役所寺院の建設も新様式が用ひられ、建家には礎石を用ひ、貴族の住家には板の間へ畳を敷くようになったり、醫者、工人へ革、紙墨、繪具、鍛冶)の技術者、音楽伎人等が入り込んで来た。交通の要路の各地で市場が出来、日を決めて近隣の人が集り、針糸、織物、菓子、魚、米、紙墨、筆、味噌、三日市場、四日市、五日市等はそれ／＼の日に市を開いた名残りである。

